

# 御幸町だより

No.148 2022年7月31日

京都御幸町教会

〒604-0933

京都市中京区御幸町二条下る  
山本町434

TEL・FAX (075) 231-3441

## 『主は羊飼いな』

(詩23編)

牧師 村島 義也

この詩は「旧約聖書中の真珠」とも呼ばれる。それほど時代を超えて多くの人々の心を捉え、人々自身の祈りとなってきた詩である。二重のメタファー（隠喩）がこの詩の特徴であり、詩想の豊かさを生んでいる。全体としてこの詩は人生を巡礼にも似た一つの旅に譬えている。その上で特に1～5節においては、そのような旅が更に移牧の風景～羊飼いが群れを移動させる様に譬えられている。

1節、「何も欠けることがない」というのは羊の誇りでも、強がりでもない。現実的な満足感でもない。羊飼いなへの信頼である。信仰とはこういうことかも知れない。欲の目をもってみれば、むしろ「欠けること」だらけだ。しかし主が羊飼いなであられるから「欠けることがない」。この日は羊飼いな導きの下にある。羊は目的地へと歩かされている最中はしんどいかも知れない。しかし青草の原、憩いの水のほとりは羊飼いな計画の中にある。だから歩く辛さにも荒れた道にも意味は欠けていない。つまりは羊飼いながいてくれる～そのこと自体がいつも欠けることのない安心なのだ。

2～3節、潤いに満たされ生気を回復する魂。「生き返らせ」は文字通りには「呼び戻し」(連れ戻し)。辛い道が続くと「生きてて何になる」、いい事があると「生きててよかった」と羊の思考は単純だ。しかし信仰の道・主に導かれる人生の道もこんなところがある。生きて行って分かること、後で分かること、感謝になることがある。そういう気づきは、生きて行く所に起こって来る言わば小さな悔い改めであり、人生への思いや知恵を深めてくれる経験だが、それは主の導きへの信頼に「魂を呼び戻される」時でもあるだろう。だから「正しい道」とは道徳的なことではなく「最善の道」ということ。羊は願いとして最善を思い描き、何時も目の前にそれを求めている～それは青草であり水場。しかしそれに至らせる「最善の道」を承知しているのが羊飼いな。主イエスは「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」と言われる。そし

て道である主は「わたしは良い羊飼いなである」と言われる。

さて、4節～羊の旅は「死の陰の谷」(文字通りには「暗黒の谷間」)に至る。何より不安なことには、谷間の狭い道は仲間と隣り合って進むことが出来ない。羊は長い列となる～猛獣や山賊の危険が高まる。普段は仲間と一緒にいることが楽しみであり安心だが、こんな時にこそ羊の心に大事になる思いがある～羊飼いなが「共にいてくれること」。鞭や杖を帯びた羊飼いな姿が見えると不安な羊は力づけられる。それらを用いて羊飼いなは敵から羊を守る。人生にもこんな道の日がある。肩寄せあつては進めない～どうしても独りになって通過せねばならない暗い道、孤独な悩みの時でも私を独りにはしない方、見捨てず共にいて下さる方がある。主イエスは言われる、「わたしは良い羊飼いなである。良い羊飼いなは羊のために命を捨てる」。また、「あなた方には世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」(ヨハネ16章)。世の悩みと死に打ち勝っておられる方が一緒に歩いて下さる(詩84・6f)。

5～6節は羊のイメージを離れ、終りに近づく「旅人」が苦しみの最中に見る夢～天国の幻。ここについてはある註解書に情感のこもった言葉があったので、それをご紹介します。「旅が進むにつれ、死も近づく。〈苦しめるもの〉も増える。青草のあるところ、いささかの水のある憩いの場はまれであり、争いやかけひきの場でもあり得る。しかし神の家での宴も近づく。…群れは追い立てられて進むのだが、追うのは〈恵みと慈しみ〉で、決して災いや苦難ではなかったのだと実感する時も来る。旅は終り、神の家に帰り着く」。

「主は羊飼いな、わたしには何も欠けることがない」。羊の誇りでも、強がりでもない。羊飼いなへの信頼である。主が共にいて下さること…お金よりも名誉よりも、あらゆる快樂よりも、それだけが、それこそが天国の道の必要なのであって、それについては今日、主の群れの一人一人に「欠けることがない」。